

音楽教育におけるミュージカル（その二）

佐藤 敦子

（福島女子短期大学）

Ⅰ はじめに

本学合唱クラブでは84年度より定期演奏会でミュージカルを上演している。このように音楽教育の中にミュージカルを取り入れる事により学生の連帯感、協調性、信頼関係、責任感、友情の芽生える事や、学生の演技力、表現力、創造性が高まり、音楽的能力も向上する事などを前回の発表（第41回保育学会）で述べた。本稿では、さらにミュージカルの教育的意義について昨年度上演したギリシャ悲劇「アンティゴネ」を例に述べてみたい。

Ⅱ 「アンティゴネ」あらすじ

（ソポクレス原作、遊佐端二脚色・作曲）

テーベの王オイディプスと妃イオカステの間に生まれた呪われた4人の遺児達は、イオカステの弟クレオンに育てられ成人する。長男ポリュネイセスはテーベの王となるが王位交替時期がきても弟エテオクレスに王位を譲ろうとしない。エテオクレスはクレオンの助力で兄を追放、兄は隣国に亡命した。やがて兄はテーベを襲撃、二人は共に戦死する。加えてクレオンの長男も戦死、クレオンはポリュネイセスの屍のみを野に晒し、これを葬った者は死罪にすると布告する。しかしアンティゴネは、死者は全て神の手に委ねられ、人間の手に属するものではないと兄ポリュネイセスを手厚く葬る。クレオンは激怒し死罪を宣告する。クレオンの次男ハイモンは彼女と許嫁であり彼女の助命を望んでいるがクレオンは王の權威を口に耳を貸そうとしない。死を覚悟しているアンティゴネを励ますハイモンは父クレオンを説得するが口論となる。ハイモンとアンティゴネは愛を確かめ合う。アンティゴネは呪われた父オイディプスの贖罪とハイモンの愛に包まれ自害する。ハイモンも頑冥な父の拒絶に会い、更にアンティゴネの遺体を見て絶望し自害する。クレオンの驚愕と妻エウリュディケの悲嘆、エウリュディケも自害する。クレオンは「神よ私を死なせてくれ、この手に触れるもの全てが滅びてゆく」と泣き叫ぶ。

この「アンティゴネ」の主題は宗教と政治の中で問われる人間の尊厳についてである。

Ⅲ 演出の実際

第14回定期演奏会で上演した「オイディプス」の続編ともいうべき壮大なドラマをいかに分り易く筋立てするか、どのように聴衆を飽くことなく魅きつけてい

くかに苦心した。また附曲した音楽は1台のピアノ、独唱、合唱のみで行った。

1 コロスの向上について

(1) 音楽的向上について

① 全体を通して動きながらうたえるように柔軟体操や発声練習の強化をした。今回は発音、呼吸法、身体を支えるについて力を入れた。また3つのパートのハーモニーが調和するようにハーモニー感を会得させたり、パート練習を徹底した。

② コロス役の各個人がソロを経験できるようにシュプレヒコールの部分全員に体験させた。

(2) 振り付け、隊形について

舞台進行上のコロスの動きが重要である事を強調した。その中で2つ程例を挙げたい。

① コロス達がクレオンに「正義」について問いかけるシーンで、パート毎に次から次に同じリズムで追いかけていく歌がある。歌に、より広がりを持たせたい為に、また緊迫感を高めたい為にコロスの動きもパート毎に歌に合わせて一歩ずつクレオンに迫る振り付けを考えた。

② 前々回に上演した「オイディプス」のあらすじをコロスが次々に語る場面（シュプレヒコール）の後、そのシーンのクライマックスともいえるべき合唱が入る。当初この部分の振り付けは、歌が力強くダイナミックである事、またその場面の状況から身体を大きく動かす振り付けを考えた。けれどもそれでは平凡で変化がない為に意表をつく演出を考えた。前奏部分では動くが、歌の始まりからは振り付けを一切せず立ち止まり、各人が客席の一点に視線を集中し、身体全体と顔の表情に緊張感をみなぎらせてその高まった感情をうたった。

2 プリンシパルの向上について

(1) 音楽的向上について

今回は今まで以上にプリンシパルのソロや二重唱が多い為により歌唱力が要求された。その上この会場はパイプ・オルガンの演奏を目的としているので、会場が広く響きが特殊であり、マイクが一切使用できない。その為、特に声がよく通るように、明瞭な発音をするようにという点に力を入れて指導した。

(2) 演技力について

(1)と同様に台詞の部分が多い為に発声の仕方や発音

の仕方に注意した。また演技者は自分の持つ全ての能力（身ぶり、言葉、場面感覚、思考、感情など）をその役に移入し演じなくてはならない。そして今回はギリシャ悲劇という遠い古代の架空の出来事を演じる為に想像力も必要とされた。その点について自覚を持たせた。また実際の舞台上での身ぶり、仕草、台詞の言いまわし、タイミングを細かく指導した。

① 台詞の言いまわし

クレオンとハイモン父子の口論するシーンでは、台詞のオーバーラップをしたり、激しい口調と速いテンポでの言いまわしをした。逆に哲学的な内容の台詞ではゆったりとしたテンポで堂々と語らせた。このように台詞の言いまわし方はその口調・テンポ・タイミングに配慮しながら、ストーリーの流れに変化をつけた。

② 身ぶり・仕草

○クレオンとハイモンの口論のクライマックスでは、今にもお互いにとびかかるような構えをして、実際には対峙させるだけの演出でその場の緊張感を高めた。

○アンティゴネとハイモンが二人の愛を確かめ合うシーンでは、手を取り合ったり、見つめ合ったり、ハイモンがアンティゴネを抱きかかえるなどして場の雰囲気盛り上げた。

3 プリンシパルとコロスの一体化

ストーリー全体がプリンシパルとコロスの一体化によって流れて行くのは当然であるが、その中から3シーン程取り上げてみたい。

① 戦いを表わす勇壮なソロ・合唱、息子・兄の死を悼むエレジー、そして再び戦争の恐ろしさを訴える力強い合唱が交互に出てくる。ここではクレオンの独唱から全体合唱に入る所で、左後方のプリンシパルと右後方のコロスをプリンシパルの後にコロスが続くような隊形でステージ前面へ移動させた。

② (2)の③で述べたアンティゴネとハイモンの愛を語り合うシーンの最後に2人の二重唱へコロスの合唱が加わる。ここでは神への讃美と祈りを、そしてその至上の愛を祝福する情景を表わす演出をした。

③ クレオンが自分の為に起きた哀れな結末を嘆くと同時に自責の念にかられ、ハイモンの遺体にとりすがり泣き叫ぶ。そしてコロスがそのクレオンへの哀れみと死んで行った者たちへの嘆きと悲しみを込めてうたうラストシーンであるが、ここではコロスがクレオンの周りを取り囲み、クレオンに近づいたり離れたしたり。そして短調から長調に転調した部分からは明日への希望を示唆する演出で幕を閉じた。

IV 結果と考察

(1) コロスの音楽的向上

学生は動きをつけながらも以前より複雑なリズムやメロディを安定してうたえるようになった。またハーモニーも調和するようになった。練習の成果ともいえる。加えて各声部の旋律が魅力的であった為に学生が各声部に存在感を感じると同時にハーモニーの美しさを感じた為であろう。また学生1人づつをステージ上でうたわせた事は、学生の音楽への意欲を注いだと同時に大きな自信を持たせる事ができた。学生各自に自己の存在価値と必要性を持たせる事ができた。

(2) コロスの振り付け

内容を理解し、物語りに溶け込むにつれてストーリーとの一体化を図るようになり、動きもスムーズになった。学生が慣れる事により動きを大きくしない静の状態でも緊張感や力強さを表現できるようになった。

(3) プリンシパルの音楽的向上について

プリンシパルを演じた学生各自がそれぞれ独唱・二重唱で予想以上の力を発揮した。またハイモンとアンティゴネの愛を語り合う独唱・二重唱の部分は、ハイモン役の学生のリードにより盛り上がりと同時にロマンティックな歌詩と美しく甘美なメロディがより一層その場を盛り立てた。

(3) プリンシパルの演技

ハイモン役の学生の際立った演技、そして日頃目立たないおとなしい学生が当初の杞憂に反し、最後までやり遂げた。このように学生が予想以上の力を発揮した事について考えたい。遠い古代の虚構の出来事、架空の人物であるが故に自由に演ずる事ができた事もある。そしてそれ以上にプリンシパルという大役を聴衆の前で演ずるという極限の緊張の場に立たされた事が大きいのではない。極限の状況に追い詰められた時学生は自己に目ざめ自己を改革しようとし予想以上の力を発揮したといえる。

(4) プリンシパルとコロスの一体化

学生はストーリーの内容と充実感の残る音楽に共感した時、作品との一体化を図ろうとして全力を尽くす。そしてより向上しようと意欲的になる。その時自己を発揮すると同時に相手を認め、お互いの個性や能力を尊重し共に高まろうとする。その為に全体が盛り上がったと考える。

学生はミュージカルを通し自己の存在価値を見い出す。また自己に目ざめて自己を改革しようとする。そしてお互いをも尊重し合う。その中から生まれた作品は聴衆にも大きな感動を与えた。

V おわりに

今後も音楽教育におけるミュージカルの意義について更に研究を深めたい。